
理想体重は80キロ

28号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

理想体重は80キロ

【Nコード】

N1997BA

【作者名】

28号

【あらすじ】

デブしか愛せないお坊ちゃんに「愛人になれ」と迫られたのは、彼につかえるメイドだった。

愛人のすゝめ

「結婚することになった。だから、お前は今日から愛人だ」
まるでそこにある醤油とって、くらいのノリで、坊ちゃんは私にそう言った。

美しい指で器用に器用に箸を動かし、納豆をかき混ぜている坊ちゃんことクリストファー様は私の雇用主であり幼なじみであり恋人だった。

正直私が彼の恋人である自信はまったくないし認めたくはなかったが、愛人になれと言うくらいだから坊ちゃんはそう認識しているのだろう。

「結婚するのはあの、何て言ったかな、前にケントおじさんの誕生日パーティーであつた子だ」

「アンヌ様ですか？」

「ちがう、もっと細くて赤いドレスの」

「ジュエル、キャサリン、リンダ、ナオミ、リリー、ロイス」

この手の問答は非常に時間がかかるため、私は細くて赤いドレスを着ていた女性の名前を列挙する。

すると坊ちゃんはパチンと指を鳴らし「リンダ！」と叫んだ。その手のキザなポーズも、腹が立つほど似合っている。

「そうだ、名前を思い出したら忌々しくなったきたぞ！ あのガリガリ女はリンダだ！」

「坊ちゃん、レディーに対してガリガリ女はいけません」

「だってみただろうあの細い腕と腰、まるでチョップスティックだ」と言いつつ納豆の糸を引く箸を振りまわす坊ちゃんを落ち着かせ、私はため息をつく。

「いいですか坊ちゃん、あなたはもう27です。そろそろその偏った趣向と性癖と女の子の好みを改めるべきです」

それから私はこの手の話題の締めくくりに使う決まり文句を口に

した。

「お忘れのようですが、坊ちゃんはカンパニーの跡取りなんですか
ら」

途端に、坊ちゃんは無駄に美しく育った顔をこれでもかとゆがめる。

「跡取り息子だろうが何だろうが僕は男だ。なんと言われようと、
たたない物はたたないんだ！」

そう言う即物的な話しているわけではなかったが、まあそれも原因のひとつなので否定は出来ない。

「ですが結婚なさるのでしょう。それに跡取りはどうなさるおつもりですか」

「体外受精ですますから問題ない」

本当にすまされる金があるからたちが悪い。

「だから僕は彼女とはやらない。けれどそれじゃあ欲求不満になる
だろう、だから僕には君が必要だ」

そういうと、坊ちゃんは誓約書と書かれた紙を私の前に差し出した。

「これからは世話係ではなく愛人になれ。そして僕の体を慰めろ。
俺の体を男に出来るのは、そのデカイ尻しかない！」

「坊ちゃん、いくら何でもそれは私に失礼です」

「事実を告げることの何が悪い！　僕はお前が好きだ、その脂肪ま
みれの体に丸い顔に太い足！　かといって豚のように醜すぎもしな
い顔はキスするのに最適だ」

だから愛人になれと迫る顔が魅力的でないとは言わないが、勿論
ここサインなどするはずもない。

かわりに私は、坊ちゃんに冷静になって頂くべく、彼のかき混ぜ
ていた納豆を無礼を承知で彼の頭にぶちまけた。

「デブ好きも大概にしないと、痛い目見ますからね」

むしろ痛い目を見せてやると決意した私の笑顔に、坊ちゃんは望
むところだと肩を怒らせていた。

愛人のすゝめ（後書き）

他作のアンケートで頂いておりました「デブ専の彼を矯正」というオーダーより作成させて頂きました。

よろしければお付き合いの方、よろしくお願い致します。

※1／5 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございました）

紳士からの呼び出し

「時計を買うならクロックワーク」のCMでおなじみ、庶民からセレブまで幅広い客層を持つ腕時計メーカークロックワーク社の社長、リチャードⅡクロックワーク。

そんな偉大なセレブの前に坊ちゃんの誓約書を手に立たねばならなくなったとき、私は本当に胃が痛かった。

それは別に彼の容姿や人柄が恐ろしいからではない。

穏やかな人柄と時計にかける情熱で社員と顧客に愛されてきた彼のトレードマークは、いつも絶やさぬ穏やかな微笑みで、使用人である私にも彼はいつも優しくしてくれる。

だが問題は、彼がとても優しい紳士であると同時に坊ちゃんの父親である事だ。

「ウチの息子がまた馬鹿なことを言い出したそうだが、大丈夫かね？」

と私を気づかうリチャード様の声はやっぱり穏やかで、逆に申し訳ない気持ちになってきてしまうのだ。

「別に君を責めている分けじゃないよ。ただ、少し話を聞きたかっただけなんだ」

心得ておりますと私は静かに頷けば、リチャード様は私の肩を気づかうように叩いてくれる。

坊ちゃんと私は、リチャード様と共に彼が有するニューヨークのペントハウスにすんでいる。

故に朝の珍事の詳細を教えて欲しいと、家主であるリチャード様から呼び出されたのはすぐのことだった。

この家には私以外にも7人ほど使用人がいるし、多分その誰かから話が回ったのだというのは見当がついていた。

とはいえ皆気が利く者達なので、伝わった話に無駄な尾ひれや憶測はないようだった。

それに感謝しつつ、私が事の次第を手短に説明しながら誓約書を渡せば、リチャード様は副社長が金を横領したときでさえ消さなかった笑みを消失させた。

なにせ誓約書には、結婚後はどれくらいの頻度で体を重ねろだの、どれくらいの金額で囲ってやるだのという生々しい事項が並んでいるのである。

そして何よりリチャード様は常識的な紳士なのだ。

坊ちゃんの行動を理解するのは酷く困難なことに違いない。

「すまないねリナ、後で私の方から叱っておく」

絞り出すような言葉は苦渋に満ちていて、むしろこちらが申し訳なくなってくる。

「ただまあ、私が言ったところで考えを改めるかどうかが問題だが」
ここでもまた、心得ておりますと私は頷く。

坊ちゃんトリチャード様は決して仲が悪い関係ではないが、恋愛の2文字がつくと、坊ちゃんがリチャード様の手に負えない暴れ馬に変身するのはいつものことだ。

とはいえ別に、リチャード様が多くの金持ち同様、愛人を囲ったり家族を無視して羽目を外した反発で、その手の言うことを聞かないというわけではない。

むしろリチャード様は、その手のことに金を使うなら息子と野球を見に行くタイプの方だった。早くに母を亡くした息子を、大切に大切に育ててきた方なのだ。

大切にすぎで、坊ちゃんが異常な性癖に目覚めてしまったとき目をつむってしまったのは問題だったが、リチャード様の努力を思えばそれを責めることも出来ない。

むしろあれだけ変態なのに、有能な跡取りに育て上げただけで快挙である。

あの物言いからは信じられないが、坊ちゃんは恋愛以外のことは酷くまともで、リチャード様の跡取りとして仕事の方もまっとうにやっているらしい。

主にその恋愛面で迷惑をかけられている私にはにわかには信じられないが。

「なありナ、君はこれをどう思う」

日頃の傍若無人な態度を思い起こし、眉の間に深い渓谷を作っていた私に、リチャード様が不意に尋ねた。

「お相手の方に失礼だと思います」

「他には？」

「リチャード様には申し上げにくいですが、クリスマス様の性癖には矯正すべきゆがみがあると思います」

そう言う私の体をじっと見て、それからリチャード様は慌ててすまないと目をそらした。

「たぶんその、あの子は無意識に母親の影を追っているのだろう。アンは君に似てとても大らかでふくよかだったからね」

「私はふくよかどころか完全にデブの部類ですよ」

気温が寒くなったせいか、今月だけで2キロも体重が増えている。けれどそんな私の腹部を抱きしめるのを極上の喜びとしているのが坊ちゃんである。

「リナの贅肉は世界一だ、この脂肪は絶対に手放さない」

と冗談ではなく本気で言ってくるのが坊ちゃんである。

もし雇い主の息子でなければ、本気で殴り飛ばしているところだ。「差し出がましいようですが、クリスマス様にはその手の趣向を変ええるカウンセリングを受けさせるべきだと思います。あのご様子だと、結婚生活が破綻するのは間違いないでしょう」

私の顔に、リチャード様はまたしても申し訳なさそうに私を見る。「そもそもこの結婚の話を了承させるつもりはなかったんだよ。クリスマスには君がいるし、絶対断ると思って話をしたんだ」

確かに、坊ちゃんの恋愛に口を出したことのなかった彼が、突然彼に相手を宛うのは不自然だと思っていた。

何せはじめて坊ちゃんに告白された15の時から、リチャード様は交際に文句ひとつ言わなかったのである。

あのころから私はまん丸で、いじめられっ子で、セレブだらけの社交場では浮きまくるタイプの少女であったにも関わらず、彼は今の今まで別れると言ってきたことはない。

「ねえリナ、君はどうしたい？」

そして相も変わらず、リチャード様がそんなことを言う。

彼の優しさはわかっているから、彼が何を言わせたいかもよくわかる。

けれどそれに乗るほど、私は女々しくはない。

「クリス様が普通の女性を愛せるよう、少し手を打とうと思います」私の言葉にリチャード様は残念そうだったが、あの子のことは任せる。最後は頷いた。

「クリスは君に甘えすぎていたしね、これも良い機会かもしれない」
「では多少手荒なことを行っても？」

「好きにしてくれていい、君にはその権利がある」

「ではさっそく、クリス様にはデブ断ちをして頂こうと思います」
きっぱりすっぱり言い切れば、リチャード様は酷く不安そうな表情になり、それから躊躇いがちに頷いた。

デブ断ちと身辺整理

坊ちゃんのデブ断ち決行を決意した私が始めに行ったのは、彼の身辺整理であった。

ようは、彼の周りにある彼の歪んだ性癖を増長させるアイテムの破棄だ。

エロ本、A V、ポスター、フィギュア等々、坊ちゃんが愛してやまない「オデブちゃん」関連アイテムがその対象だ。

坊ちゃんが出かけた隙に部屋に忍び込んだ私は、ゴミ袋を片手に部屋をざっと見回した。

金持ちだろうと何だろうと、世の男のエロ本の隠し場所というのは古今東西一緒であると執事頭からアドバイスは貰っているので、まず手始めに、私は無駄に大きなベッドのマットレスを持ち上げる。かなり重いが、デブはデブでも私は動けるデブだ。

相撲取りよろしくマットレスを持ち上げ、私は魔の巣窟の扉をこじあげた。

「うわあ……」

そして後悔した。マットレスとベッドの木枠の間に挟まっていたのは、1冊残らずオデブちゃんが写るエッチな本である。

こういうマニアックな物って結構あるのだと感心しかけたが、特に使用頻度が高そうな枕元の本の間に挟まった自分の写真を見たたん、私はげんなりした。

そう言えば最近、仕事が忙しくてその手のことをしていない。その上彼が望んでも色々な理由を見つけては行為を拒んでいたのだ。別に坊ちゃんの体がいやというわけではなかったが、お互いいい年だし、そろそろ使用人としてのけじめをつけねばと思っていたのである。

その所為で坊ちゃんは「お前の写真をおかずにしてやる！」と馬鹿なことを叫んでいたが、まさか本気でやっているとは思わなかつ

た。

わかっていはいたが変態だ。これは何としても矯正せねばなるまい。

気を取り直した私は、今度こそ魔の巣窟の解体にかかった。とりあえずエロ本は全て処分、昔私があげた相撲の雑誌も一時的に引き上げることにする。

本当は捨てても良かったが、エロ本と違いベッドの下に隠された箱に嚴重にしまわれていたそれは、まるで宝物のような扱いだったから、さすがに問答無用で処分するのは忍びない。

とはいえ相手は変態、これをおかずにしだしたら困るので、一般的なエロ本で事をいたせるようになるまでは避難である。

その後、クローゼットの奥やら本棚の後ろなど、ありとあらゆる場所に隠されたデブな雑誌やビデオ等の関連アイテムを全て処分し、最後は様々な場所に散っていた私の写真を回収する。

一緒に写っている物がほとんどだが、私の寝顔などいつ取ったのかと驚くような写真も多い。

今更だが彼の撮った写真を見ると、ちゃんと女の子として見られていたのだなと少しだけ感動した。

彼は私を好きなのではなく、私の脂肪が好きなのだと思っ
ていたからだ。

なにせ出会ったときの彼は脂肪欠乏症状態だったし、告白されたときも今も、彼の周りにはデブが本当に少ないのだ。

病的なデブ専である一方、坊ちゃんは大手企業の社長子息である。故に彼の周りを取り巻く人々もセレブばかりで、その手の人種にデブは殆どいない。

男子はまだしも特に女子はその殆どがモデル並みに美しく、脂肪吸引を趣味と言い張る者達ばかりだ。

そんな女子達にもにこやかに接してはいたが、勿論それは見た目だけ。

家に帰ると必ず「あんな棒みたいな女にキスなんてしたくない！」

と坊ちゃんが激怒するのは日常茶飯事である。

だから一番側にいて、大好きな脂肪にまみれた私を愛でるのは当然のことだった。

彼にとって、唯一の癒しが私だったのだろう。

そして私は人並みの感性だったから、美しい顔で愛を囁かれてうっかりOKしてしまったのだ。

褒め言葉が酷いことに目をつむれば、坊ちゃんは優しい。デートの時のエスコートは完璧だし、私が食べたいと思ったものは何でも食べさせてくれる。

だから拒む理由はなかった。他に好きな相手はいないし、今後出来るとも思ってたからだ。

その結果、私達はもう10年以上付き合いだ。

けれど彼と結婚できるなんて図々しい事は勿論思っていない。私はただのメイドで、坊ちゃんは性癖さえ直れば立派な青年だ。

だから写真を破り捨てていく私の手に躊躇いはない。

映画などでは良く昔の恋人の写真を破るシーンがあるが、今の状況はまさにそれに近い。

だがまだ100枚ほど写真が残っている状態で、予想外のことが起きた。

坊ちゃんが、帰ってきたのである。

坊ちゃんの地団駄

「何してる」

酷く驚いた顔した坊ちゃんが登場したのは、二人のツーショット写真を真ん中から破った丁度そのときだった。

「身辺整理です」

ずれたままのマットレスやすき間の空いた本棚に、聡い坊ちゃんはずぐさま状況を把握したようだ。

「プライバシーの侵害だ!」

「坊ちゃんのためです」

雑誌を先に運び出しておいて良かったと思いつつ、私は写真を手立ち上げる。

勿論坊ちゃんはそれを奪おうと腕を伸ばしたが、その動きは予想のウチだ。

小さな頃からよく取っ組み合いの喧嘩をしてきた仲でもある、彼の動きは誰よりも良くわかつている。

「それは俺のだぞ!」

「おかずに使われると困るので」

そう言ってエプロンのポケットに残りの写真を突っ込めば、坊ちゃんは年甲斐もなく地団駄なんぞを踏んでいる。

「おかずにされて困るなら、お前が相手をすればいいじゃないか!」

「残念ながらその提案は却下です。ご結婚が決まっている方と夜を共にするつもりはありませんし。ついでに言うと、自分の写真をおかずにされたくありません」

私は一言一言にこれでもかと言うほど怒りを込めた。

なのに何故か、坊ちゃんはそこで嬉しそうな顔をした。

「お前、もしかして結婚のことを怒っているのか?」

その上そんな当たり前のことを尋ねる彼に、私の堪忍袋は見事にぶち切れる。

「笑い事ではありません！　あなたはあまりに不誠実すぎます！
そして、変態すぎます！」

言うと同時に激しく睨めば、さすがの坊ちゃんも地雷を踏んだと
気付いたようだ。

だが思う遅い、そんな脅えた顔をして私も私は絶対に許さない。

「私決めたんです、坊ちゃんをまっとうな人間にすると」

「私はまともだ」

「まともな人間は80キロ越えのデブなメイドを捕まえて愛人にな
れだなんて言いません」

そして私は愛人など願い下げだと、この場できっぱり宣言する。

「だから差し出がましいとは思いましたが、あなたの性癖を矯正さ
せて頂きます。お相手の方にも失礼ですし、このままだと坊ちゃん
の下半身はデブと結婚しない限り暴走を続けてしまいます。それ
はあなたの元カノとして、お世話係として、幼なじみとして、見過
すわけにはいきません」

「ならお前が……お前が俺の暴走を止めればいいだろう！」

「正直に申し上げます。私は、ど変態な坊ちゃんにウンザリしてい
るんです」

それも心底ウンザリしていますと付け加えれば、坊ちゃんはいつ
もの勢いを完全に失った。

「…たしかに俺は少し普通とは違うかもしれないけど」

「少しどころじゃありません」

「でも俺以外にも、世のなかには沢山デブ専がいるだろ。お前
の台詞は、俺を含めた世界のデブ専にを敵に回すセリフだぞ。人権
侵害だぞ」

と、今度は話題の軌道修正を試みる坊ちゃん。だが勿論そんなこ
とは許さない。

「慎みがないのが問題なのです。どんな方を愛するのもご自由です
が、結婚相手をながしろにしてまで私を愛人にするなど言語道断。
私が断ったとしても、お相手と180度違う女性をおかずになどし

たら相手の方が傷つきます」

だから矯正します。言い訳は聞きません。

私のがんとした態度に、最後に坊ちゃんが行ったのは色仕掛けである。

「嫌だ、嫌だ嫌だ嫌だ」

そう言って私に何度も何度もキスをして、坊ちゃんは考えを改めさせようとする。

「お前の贅肉が良いんだ！ お前の脂肪が側になきゃ生きていけないんだ！」

縋るようなキスにほんの少しだけ心が揺れたのは事実だ。

けれど私は頑なに目と口を閉じ、それをなんとかやり過ごした。勿論お腹にも触らせなかった。

「おっしゃることはそれだけですか？」

最後は唇を乱暴にを拭い、それから私は彼を押しつける。

「あなたの性癖を矯正するためのプログラムを用意致しました。詳細は執事頭のアナベルよりお聞きください。ちなみに私はその間お暇を頂きますので」

ぎゅっと腕を取られたが、勿論振り払った。

あっけなく離れた腕に、それだけ彼が衝撃を受けているのがわかったが、ここで甘やかすから彼は変態の道を突き進んでしまったのである。

「お部屋の掃除を続けますので、どうか出て行ってください」

自分で驚くほど冷たいその声に、いつもは傍若無人な坊ちゃんがトボトボと部屋を後にした。

坊ちゃんの地団駄（後書き）

※1／8 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございます）

誘拐と勝負

ゴミの処分を他の使用人達に任せ、私が少ない荷物と共に家を出たのはその日の夕刻のことだった。

頂いたお暇は2ヶ月。その間、私は友人の家に厄介になることになっていく。

目的の家は前方に広がるセントラルパークの丁度反対側だ。

日が暮れかけているし、ここは華麗にタクシーでも拾いたいのが、通りに出たとたんそれは無理だと気付いた。

手を挙げた直後、私の目の前に見慣れた高級車が私の前に止まったからである。

「乗れ」

と車の窓から顔を出したのは坊ちゃんだった。

一度こてんぱんにされたくらいではめげないと思っていたが、まさかこうも早い復活を遂げるとは正直思わなかった。

「謹んで辞退致します」

「乗れ」

「坊ちゃん、その顔の横についている物は飾りですか？」

「もういい、乗らないなら俺が乗せる！」

開いた扉から伸びてきた腕が、私を車に引きずり込んだのは宣言とほぼ同時だった。

扉が閉まるやいなや走り出す車。行き先は告げていないが、運転手はかなり強くアクセルを踏んでいるため逃げ場はない。

「坊ちゃん、これは立派な誘拐ですよ」

「別にお前から身代金を取るつもりはない」

「でも脅迫するつもりでしょう」

考えを改めない限り降ろさないと平気で言うのが坊ちゃんである。むしろこのままどこかのホテルに連れて行かれ、軟禁されないと限らない。

実際二十歳のお祝いに坊ちゃんから指輪を送られたとき、高すぎて受け取れないと拒否したら、「指にはめるまで外に出さない」とセントレジデンスのスイートルームに3日間軟禁されたことがある。結局あのときは私が折れたので、今回もそれを見越しているとも限らない。

椅子に座り直しながら、私は坊ちゃんの出方をうかがう事にした。だが部屋での厳しい態度が功を奏したのか、坊ちゃんはなにやら難しい顔で黙っている。

代わりに、コホンと咳払いをしたのは運転手だ。

「坊ちゃんから、リナの送迎を頼まれております。よろしければ目的地をおっしゃって頂けませんか」

今の今までそんな気の利いた事をされたことがなかったので、私は正直驚いた。

だがこのまま無駄に車を走らせるのも申し訳ないので、私は友人の家の住所を告げる。

「かしこまりました。坊ちゃんも、よろしいですね？」

運転手の言葉に、坊ちゃんは黙って頷く。

それから彼はわざとらしく私と距離を置き、そして更に黙り込んだ。

私も言うべき事は全て告げていたので、これ以上坊ちゃんと喋る気にはなれなかった。

ぼんやり窓の外を見ながら、私が坊ちゃんの無言の訴えを無視し続けること10分。

やはりというかなんというか、坊ちゃんが唐突に愚痴り出した。

「2ヶ月も会えなくなるのに、別れの言葉も言わないつもりか」

拗ねたその声があまりに子供っぽくて、私は思わず笑ってしまう。

「真面目に言っているのに、何だその態度は！」

「いえ、本当にあなたは面白いなと」

「面白くなさない！ お前の所為で、俺は身も心もボロボロだ」

「その割にはお元気そうですが」

「元氣ではない！ 元氣ではないが、ボロボロのままでもいいからお前を引き留められないから！ だからこれは空元氣だ！」

何ともおかしな主張をしつつ、坊ちゃんは私をじっと見る。

「そんな目をされても、考えは変わりませんよ」

「わかってる」

「じゃあ何故そんな顔をするんです」

「お前のことを目に焼き付けておく。そうすれば、あのヘンテコなカウンセリングも耐えられそうだからな」

坊ちゃんの言葉に思わず驚くと、心外だという顔で坊ちゃんはむくれる。

「俺だってバカじゃない、一度怒ったお前がてこでも動かないのはわかってる」

「ちゃんと、受けて下さるんですか？」

「それで俺の性癖が変わるとは思わないが、真面目に受ければお前は帰ってくるだろう？」

さり気なく、坊ちゃんは私の手を握る。本当は振り払うべきなのだろうが、ここは彼の覚悟に免じて好きにさせておいた。

それにきつと、彼がこの太い腕を触るのはもう二度とない。

「お暇は2ヶ月だけです。それがすぎれば、ちゃんと仕事に戻ります」

「わかった。ただし、一つだけ我が儘を言わせろ」

私が頷くのも待たず、坊ちゃんは私の手を更に強く握った。

「戻ってきたら俺と勝負をしろ」

「勝負？」

「本当にデブ断ちできるかの勝負だ。2ヶ月のカウンセリングを受けても、もしまだお前に欲情したら俺の勝ち。出来なかったら俺の負けだ」

「それは、カウンセリングを真面目に受けるという条件で？」

「そうだ。お前がセッティングしたカウンセリングやらなにやらは全てちゃんとやる。でももしそれでも治らなければ、お前の計画は

無駄と言うことになる。そんなことに2ヶ月も付き合わされて、ごめんなさいじゃすまさない」

「私が負けたらどうするんですか」

「俺の言うことを、何でも一つ聞け」

愛人になれと言われるのだろうか、坊ちゃんの言葉に少しだけ不安になった。

けれど坊ちゃんがあんまり真剣な目で私を見るので、最後は渋々頷いてしまった。

「わかりました。私に欲情したなら、何でもお聞きします」

「約束だぞ」

そういうと、坊ちゃんは私が昔教えた指切りを迫る。

「ハリセンボンだからな」

「わかっております」

そう言って小指を絡めたとき、車は目的地に到着した。

扉を開けてくれようとする運転手と坊ちゃんを制し、私は一人車を降りる。

「俺は絶対、デブ以外には欲情しないからな！」

「その言葉は2ヶ月後にお聞かせ下さい」

「わかった。では2ヶ月後に、お前の泣き顔が拝めるのを楽しみにしている」

坊ちゃんらしい勝ち気な台詞と私を置いて、車はゆっくりと走り出す。

途端に寂しさと罪悪感が胸を突き、私は自分を情けなく思った。

坊ちゃんは自信満々だが、あの勝負はどうあがいても私が勝つと決まっている。

坊ちゃんに宛ったカウンセラーやら療法士は誰も彼も評判の者達だし、何より私には奥の手があるのだ。

きつと負けたと知ったとき坊ちゃんは私を酷くなじるだろう。今度こそ心底嫌われるかもしれない。

だがそれでも、一度決めたことは覆さないのが私の信条だ。

それでもうすぐ胸の痛みを必死に押し込めて。

私はたった一枚、破らずに持ってきた坊ちゃんの写真を撮りだした。

そこに映る私と坊ちゃんはまだ子供だ。私はデブな上に酷く暗い顔しており、対する坊ちゃんは、そんな私に抱きついて顔をニヤニヤさせている。

幼い頃から変態の片鱗はあったが、実を言えばその変態の部分に救われた時期もあった。

けれどもうそこに縋り付くわけにはいかない。

坊ちゃんの変態な一面に救われたからこそ、今度は私が坊ちゃんのために頑張るときなのだ。

坊ちゃんが素敵な結婚相手に出会えるように。そしてその方といつまでも幸せに暮らせるように、坊ちゃんの中にあるデブへの愛は駆逐せねばならないのだ。

彼のメイドとして、そして彼女としての最後の仕事をやり遂げるべく、私は来るべき勝負の日に向けて写真をきつく抱きしめた。

誘拐と勝負（後書き）

※1／8 誤字修正しました（ご指摘ありがとうございます）

刺客と媚薬とブランドー

右の頬に優しく、左の頬に長く、そして最後に深くいやらしく口づけを唇に落としたその女は、どうだと言わんばかりの顔で俺に微笑んでいる。

「具合はどうですか？」

しかし彼女の考えを口にしたのは本人ではなく、なにやら不気味な薬品を手にした連れの男だった。

「残念ながら、彼女の大して美しくもない顔と体では私の体は満足できないようです」

ニッコリ微笑んだのに、返ってきたのは平手打ちと男のうなり声だけだった。

「特製媚薬も駄目だなんて、こんなのは初めてだ……」

「打つ手がないならそろそろお引き取り願えますか？」

「待ってください。今度はこっちの媚薬でいきましょう！ 飲んだ方はそのあと3日間欲情しっぱなしだったほどの効き目ですよ！」

そう言って差し出された媚薬は何とも珍妙なマールブル色をしており、正直飲みたくはない。

しかたなく、俺は奥の手として財布から100ドル札を3枚抜き出した。

「そこまで言うなら薬は買い取りますから、今日はどうかお引き取りを。申し訳ありませんが、私も多忙な身ですので」

ごねるかと思ったが、むしろ男は大喜びで300ドルと交換に媚薬を押しつけ、頬を打ち据えた女と一緒に部屋を出て行く。

勿論手の中の液体が300ドルもするとは思わないが、それで手打ちにして貰えるならありがたい。

邪魔者が消えたことにホッとしつつ、俺は飲まれた珍妙な薬の口直しに、ベッドの下に隠してあったブランドーを手にとった。

けれどいくら煽ってもそれはちっとも美味くない。薬の味もそう

だが、先ほどの女の舌触りがまだ残っている感じがして酷く不快だった。

あれがりナのキスだったらと、そんなことを思った自分に俺は思わず頭を抱える。

彼女が暇と称して屋敷を出て行って、もうすぐ2ヶ月だ。

その間俺は、仕事の合間を縫って彼女の置きみやげの対応に追われている。

彼女の置きみやげは、普通の女性を愛せるようになるためのカウンセリングという奴だった。

けれどカウンセリングらしいカウンセリングを受けたのは最初の1月だけで、そのあとは今の男のような怪しい療法士や催眠術師との面会ばかりだった。そしてその殆どは、とにかくうさんくさい。そんなうさんくさい奴らの相手を、多い日は5時間ほどしなければならぬのは苦痛だ。

とはいえそれも今日で終わりだ。

先ほどの男がりナの用意した最後の刺客であり、来週には彼女もここに戻ってくる。

途端に笑みがこぼれそうになるのは、この2ヶ月俺の下半身は一度も本来の活動を行わなかったからだ。

先ほどの男が飲ませたのも精力剤のたぐいのようだが、目の前の女にいくらキスされても俺の下半身は1ミリたりとも起きあがらなかった。

その前の催眠術の時も、鍼療法の時も、得体の知れないクリームをあそこに塗りたいくられた時も俺の下半身はうんともすんとも反応しなかったのである。

それに気をよくし、俺はもう一杯ブランデーを煽る。だが突然、ブランデーのグラスが細い指に取り上げられた。

「クリス様、程々にされないと夜のパーティに差し支えます」
いつの間にか背後に立っていたのは、執事頭のアナベルだ。

この手の小言はりナの仕事だったが、彼女がいなかったため今は彼が

俺のお目付役だ。

「支度をせかしに來たのか？」

「いえ、まだ出発まで時間がありますので、いつものをお持ちしました」

そう言つてアナベルが差し出した物に、俺は思わずげんなりした。身なり正しい老執事持つにふさわしいとは言い難いそれは、俺の大嫌いな細い女しか出てこないAV4点セットである。

「水着、巨乳、幼女、和製アニメがございますがどれになさいますか」

「一番肉付きがいいのを頼む」

俺の返しに、アナベルはまじめくさった顔でそれらを検分し、結局選んだのは和製アニメだった。

それをプレイヤーにセットするアナベルを見ながら、俺はさり気なく取り返したブランデーを片手にソファに腰掛ける。

ちなみに彼が持ってきたAVも、うさんくさい男同様リナが用意した物だ。

2ヶ月間、毎日3本は見るようにと押しつけられたそれはダンボール3箱分もあり、古今東西のあらゆる美女を取りそろえている。むろんそこにデブはいないので俺にとってはゴミも同じだが。

「なあ、アナベル」

いきなり始まったアニメを見ながら、俺はふとアナベルに疑問を投げかける。

「何でしようクリス様」

「このアニメは、エロイのか？」

「私も和製のエロアニメというのは始めてみますが、まあ腰に来る物があります」

というアナベルはもう60近いので、そんな彼を興奮させると言うことは、リナに見立ては一応完璧なのだろう。

だが魔法使いの少女が得体の知れないジェル状の生き物にあんな事やこんな事をされていても、俺の下半身はやっぱり無関心を決め

込んでいる。

吹き替えの入っていない日本語のあえぎ声は新鮮だが、だからどうしたと言わんばかりの無反応さだ。

「これがデブなら喜んで見るのに」

「坊ちゃんの下半身は頑なですな」

「一途だといえ」

不満げにブランデーを煽れば、アナベルはそろそろ限界なのでと出て行く。

代わりに、入れ違いに部屋に入ってきたのは親父だ。

彼もまたアニメの少女になにやら感嘆していたが、別に親子でAV鑑賞をするためにやってきたわけではないらしい。

「今日のはどうだった」

「どうもならん」

「効くと有名だったんだがな」

親父が楽しげに見つめているのは、男が置いていった媚薬と「たないあなたもこれ一本!」という身も蓋もない宣伝文句が書かれたチラシだ。

「別に不能な訳じゃない」

なんで親父にこんな台詞を吐かねばならんのかと肩を落とせば、やっぱり親父は楽しそうに笑っている。

「でも今日ので一通りの事は終わったんだろう」

「ああ、あれが最後だ」

言葉にすると更に現実味が増し、俺は不意に大笑いしたくなった。未鑑賞のAVは残っているが、刺客は全て打ち倒したのも同然だ。「散々な目に遭わされたんだ、帰ってきたらたっぷり可愛がってやる」

思わずあくどい笑みを浮かべ、俺が想像したのは脂肪にまみれたリナを思いきり抱くことだ。

するとあれほどまで頑なだった下半身が、いきなりうずき出す。やはり俺にはリナかいないと主張する体に、俺は喜びを隠せなか

った。

そしてそれに追い打ちをかけるように、親父がある物を俺に手渡す。

「そういえば、言われていた物を持ってきたぞ」

「あったのか！」

「ああ、古いフィルムだから画質は悪いがな」

そう言って親父が出したのは、俺とリナが写る写真だ。

まだ出会ったばかりの幼い俺達が写るそれは俺の宝物だった。身辺整理と称してリナに破られたときは酷く落ち込んだが、見かねた親父が古いネガを引っ張り出してきてくれたのだ。

状態が悪くなかなか現像できなかったと彼は詫びたが、戻ってくるならそれで良い。

「これが欲しかったんだ」

小さなリナの姿を指で撫でれば、親父がおかしそうに笑う。

「お前は、このころからリナが大好きだったな」

「ああ、こいつの脂肪は昔から完璧だった」

それを思い出して思わず写真に頬ずりし、ついでにキスまで落とした。

「ああ、俺の脂肪ちゃん。帰ってきたら思う存分もみほぐしてやるからな」

「我が息子ながらその台詞は引くぞ」

「素直な子に育ってほしいと昔は散々言ってただろう」

「そっちの方に素直になるとは思わなかったんだよ」

ため息をつきつつ、親父は俺の手から写真を引き抜く。

「返せよ」

「その前に一つ聞いても良いか？」

返すのならばと念を押せば、親父は俺の目を真面目な顔でのぞき込む。

「お前が好きなのはリナか？ それとも彼女の脂肪か？」

何を今更と思いつつも、親父の目があまりに真剣だったので、俺

も真面目に答えてやった。

「リナだ。いくらデブ専だって、愛してなきゃたたないだろ」

「ならいい。ちょっと心配事があったんだが、今ので安心した」
なにやら含みのある言い方に、俺は嫌な予感を覚えた。

そして案の定、親父は写真と一緒に俺に爆弾を落としていく。

「さっきリナから電話があってね、メイド服のサイズが合わなくなつたから新調して欲しいそうだ」

「あれ以上大きな服何てあるのか？」

「欲しいのは、Mサイズだそうだ」

XXLの服ですら物によっては入らないと言っていたリナがM。

あのリナがMサイズ。

耳を疑う言葉と共に、俺は今更のようにリナの目論見の全容を掴んだ。

「私に欲情したらって、まさかあいつこれを見越して……」

思い起こせば勝負を持ちかけたとき、妙にすんなり受け入れたと思つたのだ。

お前に欲情したら勝ちだと言ったが、もちろんそれは脂肪付きのリナという意味だった。

けれど俺の記憶が確かなら、ただでさえ不機嫌な彼女を怒らせないように、あえて脂肪という単語は口にしなかった。

それに気付いて、リナがあえて勝負を受けた可能性は高い。むしろ内心「言質を取った!」とほくそ笑んでいたに違いない。

「でも彼女自身を愛しているなら、何の問題もないだろう?」

リナにも腹が立ったが、そう言う親父の笑顔にも俺は段々腹が立ってきた。

今回のことを妙に楽しんでいる様子だし、もしかしたら親父は、俺とリナの実関係は実は余りよく思っていなかったのかもしれないとまで勘ぐってしまう。

「なあ、あんた本当は俺とリナが別れるのを望んでるんじゃないのか」

「どうしてそう思う」

「元々結婚の話を持ち出したのはあんただし、俺が真面目にカウンセリングを受けるのが嬉しそうだ」

「悩める若者を微笑ましく見守っているだけだよ」

と煙に巻く態度は相変わらずで、でもそれが俺の不信感を募らせていく。

「俺にはリナしかない。親父が何と思おうと、この勝負に勝って俺は彼女を物にする」

「なら今日のパーティは気合いを入れると良い。ここで痩せた女の子の相手ができないようじゃ、Mサイズのリナの相手なんて無理だぞ」

「言われなくてもわかってる」

「変わり果てたリナに驚いた顔をしてみる、あっという間に逃げられるのがオチだ」

「だから言われなくてもわかってる！」

俺は親父を押しつけるように立ち上がると、側に置いてあった媚薬を手にとった。

痩せた女なんて興味もないし触るのだって嫌だ。

でも例え痩せていたとしても、来週にはリナに欲情しなければならぬのだ。

俺をはめたリナは腹立たしい。腹立たしいが、リナのいない2ヶ月は俺にとって地獄だった。

そしてその地獄を生み出したのはリナではなく、本当は自分だと言ふことも理解している。

だからこそ、俺はどうしても勝たねばならないのだ。

勝ってリナに言わねばならないことが俺にはあるのだ

だからなんとしても彼女の前で男を見せて、今度こそ本当に俺の物にするのだ。

実際に男を見せられるかどうかは激しく不安だが、だからといってこんな所で負けを認めるわけにはいかない。

「絶対たたせてやる」

手始めに300ドルの媚薬をつかみあげ、俺は覚悟と共にそれを勢いよく胃に収めた。

刺客と媚薬とブランデー（後書き）

※1／11誤字修正しました（ご報告ありがとうございます）

天使との出会い

「君のことは全く好きじゃないし今後愛する予定もないが、俺と一晩だけ付き合ってくれないか？　ちなみに俺には心から愛する人がいるので挿入はしないし君の肌に手を触れるつもりもない。ただ君の裸を見て欲情できるか検証したいんだ」

酷く真面目な顔で、500ドルを差し出しながらそう言ったのに、返ってきたのはまたしても平手打ちだった。

どうやら今日は厄日らしい。カウンセリングの女も含めるともう10回は右頬を叩かれている。

怒気をまき散らしながら歩き去る女を見送ると、俺は一息つくために背を預けていた調理代の上に腰を下ろした。

人がいれば咎められただろうが、俺のいる厨房に人気はないのでその点心配はない。

今日俺達親子が呼ばれたパーティ会場は、この厨房から少し離れたサロンで行われている。そもそも会場自体リニューアルオープン前のホテルなので、サロン周辺以外は工事を行っている箇所も多く、本来ならばここも立ち入り禁止の場所だ。

しかしさすがに今夜一晩俺の下半身のために協力してくれと、人の多い場所で言うのはさすがの俺でも気が引ける。

まあ正直いつもの俺のテンションならやれただろうが、どうも出かけに飲んだ媚薬に当たったらしく調子が出ないのだ。

媚薬だけでなく、刺客達が置いていったありとあらゆる置きみやげをラッパ飲みしたのは少々やりすぎたようだ。

気分が良くなるどころか、駆け寄ってくる細身の女達を見た瞬間、俺が覚えたのは吐き気で、ここに女を連れ込むのも至難の業だった。

それでも二度三度と繰り返し返していたが、さすがにそろそろ限界だ。俺は妙な汗が出てきた額を拭いつつ、誰も来ないのを良いことに調理台の上に横になる。

ステンレス製のそれは酷く冷たいが、火照った俺の体と頬にはむしろ心地良い。

正直もう一步も動きたくなかった。

あれだけ媚薬を飲んだのに俺の下半身は無反応。にもかかわらず、いつもより積極的な俺に女達はみな妙なやる気をたぎらせている。

叩き付ける提案に無理がありすぎる所為で、一部では俺の評価は酷く低下しているようだが、それでも俺が会場に戻ればムツとするほどの色香を漂わせた女達が、代わる代わる俺の所にやってくる。

正直それがしんどい。これがリナだったら100人でも200人でもドンとこいだが、細い女は駄目なのだ。

吐き気がしてくるほどの甘い視線をうっかり思い出してしまい、俺は一人で身もだえする。

こう言うときはリナだ。リナを補給しよう。

震える手でタキシードの内ポケットをさぐり、俺は親父から貰った写真を撮りだした。

写真のリナは酷く暗い顔をしているが、それでもやっぱり俺には天使に見えた。

実際、初めて出会ったとき俺は親父にこの子は天使なのかと聞いたほどだ。

確かあれは10歳の時、両親を事故で失ったリナを、親父が親友の忘れ形見だからと引き取ってきたときのことだ。

本当は養子にするつもりだったらしいが、年の割に妙に大人びたリナはそれを頑なに拒み、使用人になりたいと言い張ったのだという。

勿論そんな少女は雇えないが、どうしてもという彼女の気持ちをくんだ親父は、俺の世話係というあってないような仕事を与えたのだ。

そのころ、俺も母を亡くしたばかりでとにかく寂しかった。だから彼女が一生懸命世話を焼いてくれようとするのが嬉しくて、いつも彼女に甘えていた。

甘えがすぎるようになり、それが恋に転じるのはあつという間だった。

俺に寄ってくる女達と違い、彼女は俺に理想を押しつけない。知った風な口も聞かない。

ただ俺のあるがままを受け入れ、間違いがあれば否定してくれた。あのころから彼女の物言いは冷めていたが、俺を理解しようとして常努力してくれるところや、寂しいときはかならず側にいてくれる彼女が、俺は好きで好きでたまらなかった。

そしてそれは、もちろん今も同じだ。

「愛人になれ」

なんて本気で言うわけがない。ただちよつとマンネリ化していた関係に刺激を与えようと、そして彼女が積極的になるようにと思った上での言葉だったのだ。

なのに彼女が積極的になったのは全く見当違いの方面で、そのお陰で俺は窮地に立たされている。

自業自得なのはわかっていて。だからこそ、俺は別人になって帰ってくるリナが恐ろしい。

この2ヶ月で、自分がいかに普通の女に反応しないかはよくわかった。

リナだけを愛しているから。と格好いいことを言いたいところだが、残念ながらリナが言うように俺はその手の方面がちよつと変質的である。いやちよつとではなく多分相当だ。

勿論細くてもリナなら俺は側にいたい。キスもしたいしそう言うこともしたい。

でも体がその気にならなければ無理だ。細くても良いと彼女を抱きしめたところで「体は正直ですよ」とか言って俺の想いを理解しない可能性は大だ。

そしてそのまま、リナが離れていくのが何より怖かった。

そのまま違う男と結婚などしたら、俺はもう絶対に立ち直れない。頭を駆けめぐるありとあらゆる悲劇に、俺は酷く酷く凹んだ。

でも凹んでばかりもいられない。泣いていたって言ったことは取り消せない。ならば愛人宣言は嘘だと証明できるほどの愛を見せつける他はない。

俺は悲劇の妄想を振り払うべく、隠し持っていた薬を取り出した。液状のそれは媚薬と同じく、刺客達が置いていった俺の下半身に効く特製アイテムである。

それをグイとのみ、それから写真のリナにキスを落とし、俺は気合を入れて立ち上がった。

足下はふらついたが、負けるわけには行かないと、俺はこの日何度目かになる決意の言葉を繰り返した。

「俺は絶対に勝つ。死んでも勝つ」

柄にもない熱い独り言を呟きながら、俺は人気のない厨房を抜け、パーティの行われているサロンに向かった。

だが途中、ホテルのロビーを通り過ぎあたりで妙なことが起きた。急に動悸が激しくなり、目が回り始めたのだ。

やばいと思う間もなく、俺はおろしたてのソファに倒れ込んでいた。

「どうしました!？」

自分でもダイナミックなダイブを決めたと思っていたくらいだから、周りから見たら相当おかしい様子だったのだろう。

気がつけば、歪む視界の向こうから大勢の人たちが駆け寄ってくる。

そんな血相を変えなくても、と呑気に笑うつもりだったが何故だか顔の筋肉が動かない。

それどころか手も足も指の先すらも動かない。

なんだか酷くまずいことになっている。

死んでも勝つなんて言うんじゃないかと気付いたのは、遠くにサイレンの音が聞こえてきたときだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1997ba/>

理想体重は80キロ

2012年1月12日21時48分発行